戦争体験談を語られる人々の
その気持ちも察しながら

佐久間　誠二

親しくお付き合いをいただいている人たちの中に、戦場で障害を受けた人が何人かおられる。失明した人が多いのだが、小学校で担任だった先生は、右脚を大腿部から切断され義足をつけておられた。私は、心や体の古傷に触れることに遠慮して、どこでどんなことがあったのかをこちらから聞き出そうとしたことがない。今になって思えば、上手に聞くことで負傷当時の痛みやその後の苦労をねぎらうことになったのかいう気もする。

しかし、本来は人に語っていやされるような生易しい事柄ではないのだと受け止めている。

反面、終戦当時からかなり長い間、夕涼みやストーブ談義などで戦場での体験談をよく聞いた。今でも法事等で軍隊経験のある人が

居合わすと、その話に花が咲く。勝利して華やかな話も、敗走する話も、その内側に戦争の残酷性と悲惨さを秘めているはずであるが、話を交わしている人同士は話すことによって、命を的にして一つの目的のために戦ったんだという思いを共有しているように見える。そこでは、戦場での経験を持たない私は、傍観者にならざるを得ない。しかし、私は果たして傍観者であったのだろうか。

「銃後の守り」、「一億玉砕」等という合言葉と、物資、とりわけ食糧不足の中、すべての国民が戦場にいたような気がする。原爆の使用にあたっては、民間人を巻き込むことを含めて承認され、命令が下ったと聞く。あの広島、長崎はその犠牲になった。都会だけでなく、中小の町々も爆撃で焼失した。さく裂する爆弾と燃え上がる火の手、家族がバラバラになって逃げまどう状況は、戦場でなく何というのか。

第二次世界大戦が終結して五十年になる今

日も、地球上のどこかでいつも戦闘が行われている。そして、犠牲者はいつも民衆である。にもかかわらず、日本の国の人々の心の中で「戦争」は日々風化していこうとしている。

私の仕事の師匠は、先ごろ、シベリアの抑留生活の体験を「虜囚」という本にまとめられた。それは、心が痛むというよりも、体そのものに痛みを感じるような記録であった。今のような時代にこそ、言葉に尽くせないような体験をした人が語り始めた過去に私たちは心を傾けなければならないのではないだろうか。